

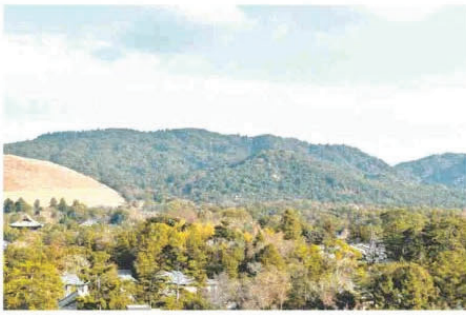
巡るなら

新ツリズム発見

3

奈良市中心部から徒歩で東に30分ほどの春日山原始林。

「古来の森がここには残っている。街のそばにこれほどの森があるのは珍しい」。昨年12月中旬、青森県から訪れた高校生らがまなざしを向ける先で、「春日山原始林を未来へつなぐ会」副会長の河原宏吉さん(66)が熱く語った。奈良の歴史文化遺産を「持続可能な開発目標」(SDGs)の教材に活用する「奈



●奈良市街地に隣接し、古来の姿をとどめる春日山原始林(左端は東大寺南大門) ●生徒たちに春日山原始林のナラ枯れについて説明する河原さん(右、奈良市で)

「本物」修学旅行で体感

良SDGs学び旅」。昨年4月に事業化され、全国の中学校、高校が修学旅行に組み込んで人気を集めている。

河原さんは、原始林が平安時代から春日大社の神域として1000年以上にわたり保護されてきたことから、世界遺産「古都奈良の文化財」の構成資産の一つとされていると説明。一方で、ナラ枯れや外来種の増殖などの課題も紹介し、「原始林の多様性が失われつつある」と訴えた。



と刺激を受けたようだ。



日本修学旅行協会(東京)の調査によると、2021年度に中学の修学旅行先は奈良県が京都府に次いで全国2位。にもかかわらず、奈良市内に宿泊する生徒数は全体の1割程度だ。なぜ多くの寺社や伝統文化が息づいているのかを考える間もなく、次の行き先に向かうのが常だった。

大学教授の中沢静男さん(62)は「1300年前の建物や仏像、伝統行事が今に残る奈良は観光資源であるのはもちろん、SDGsを学ぶ教育資源にもなりうる」と語る。



同大学は20年11月、商議所などとツアアの実施を目指す協議会を設立。歴史文化遺産がSDGsの17ある目標のどれに当てはまるかなどを記載した独自のガイドブックを作成した。モニターツアーを経て、本格的に事業をスタートさせた。

について受講。その後、少数のグループごとに東大寺などの歴史文化遺産を巡り、ガイドとの対話で理解を深め、課題の解決策を探っていく。学び旅には、昨年12月までに全国の小中高計34校の約3200人が参加。中沢さんは、SDGsの理念が20年度から学習指導要領に盛り込まれたことを踏まえ、「学校側の『教えたいけれど方法が分からない』というニーズとも合致したようだ」とみる。

協議会の実行委員長で、不動産業や観光業、運送業など6社で構成する「ノブレスグループ」(奈良市)代表の川井徳子さん(64)は「学び旅は単に『修学旅行の高度化』ではなく、次世代の育成。歴史と今がひもづく奈良だからこそ可能な観光だ」と話す。

1300年持続してきた実物を堪能できる旅は他にはない魅力だ。(土谷武嗣)

奈良SDGs学び旅

歴史文化遺産 教育資源に

参加した高校2年、対馬笙一郎さん(17)は「原始林が試行錯誤して守られてきたことでも、課題を考えてみたい」

奈良商工会議所や奈良教育大はSDGsに着目した。同

Memo 「日帰り」現状 課題

奈良は、京都と並ぶ定番の修学旅行先だが、奈良市への修学旅行生は1970年の550万人をピークに減少傾向が続く。

2000年には100万人を割り込み、「平城遷都1300年祭」のあった10年の約103万人を除き、80万人台で推移。少子化や修学旅行の多様化が要因とみられている。

また、コロナ禍で修学旅行を控える動きが加速した20年は、約17万人まで激減。21年は約26万人とやや持ち直した。ただ内訳は日帰りが約22万人、宿泊が約4万人。奈良に「泊まらない」とした学校が多い状況はコロナ禍前と変わらない。全国最下位クラスの旅館・ホテル客室数を増やすことが喫緊の課題だ。